

小学校段階におけるキャリア教育の推進の現状と 課題に関する一考察

山崎 祥 ・ 七條 正典*
(岡山市立平井小学校) (附属教育実践総合センター)

703-8282 岡山市中区平井4-19-52

*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

A Study on the Present Condition and the Problems of Career Education at the Stage of Elementary School

Sho Yamasaki and Masanori Shichijo*

Hirai Elementary School, 4-19-52 Hirai Naka-ku, Okayama 703-8282

**Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要 旨 本研究では、小学校学級担任を対象とした実態調査を行い、キャリア教育に対する意識や、取組を明らかにし、小学校段階におけるキャリア教育推進の今後の課題について検討した。その結果、キャリア教育で育みたい能力は、単に、職業・勤労に直結した内容だけでなく、様々な能力から成り立っていることを理解することで、キャリア教育の充実、推進の可能性が高まることと、そのための教員研修の一層の必要性が示唆された。

キーワード キャリア教育 自己決定 4領域8能力 小学校段階

1 問題と目的

国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2011)によると、学校教育において職業に関する教育に課題が見られることや、職業人としての基本的な能力の低下や職業意識・職業観の未熟さや精神的・社会的自立が遅れる傾向等発達上の課題があることが指摘されている。今日、著者を含め、多くの若者は、自分が、「どんな職業に向いているのか?」「どのような職業につきたいのか?」という悩みや様々な課題を抱えている。これらの若者が、社会的自己実現を図り、自らの人生をよりよく生きていく上

で、情報を収集し自らに適切に活かすための情報活用能力や進路を適切に判断し決定するため自己決定能力は必要不可欠である。そのためにも、キャリア教育を通して身に付ける能力を、小学校段階から意図的・計画的に育ていく必要性が求められている。そこで、本研究では、小学校における学級担任を対象とした実態調査を行い、小学校段階における、キャリア教育に対する教員の意識や、取組の現状を明らかにすると同時に、小学校段階におけるキャリア教育を推進していく上での今後の課題について検討することを目的とする。

2 方法

高松市内の全小学校宛に質問紙を送付し、学級担任を対象とした質問紙調査を行い、回答用紙の回収は、回答後、各学校ごとにまとめ、同封の郵パックに入れて返送してもらった。調査対象は、香川県高松市公立小学校の学級担任（回答者数635名）であり、調査時期は平成24年7月13日（金）～8月31日（金）であった。

3 結果と考察

キャリア教育に関する意識について、キャリア教育の開始の段階に関しては、小学校段階から実施すべきとする者が9割近くおり、小学校段階からのキャリア教育の必要性に関しては、多くの教員が必要であると考えており、キャリア教育の教員研修の必要性に関しては、8割以上の者が必要であると考えていることがわかった。（図1, 2参照）

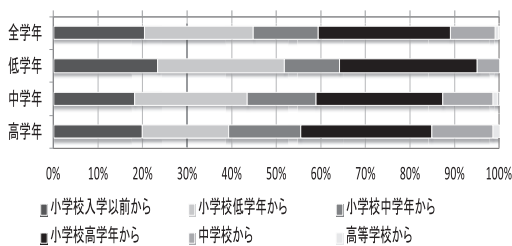


図1 キャリア教育は、どの段階から実施すべきだと思いますか

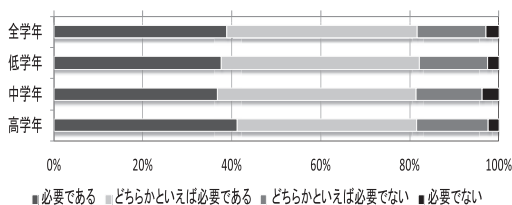


図2 教員のキャリア教育に関する研修は必要であると思いますか。

キャリア教育の取組の現状については、職業・勤労に直結する内容の指導を行うことができやすい時間（道徳、生活科・総合的な学習の

時間、学級活動）では、学年による違いは見られるものの全体として、「既に取り組んでいる」、「取り組んでみたい」と考えている教員が半数を超えた。（図3, 4, 5参照）

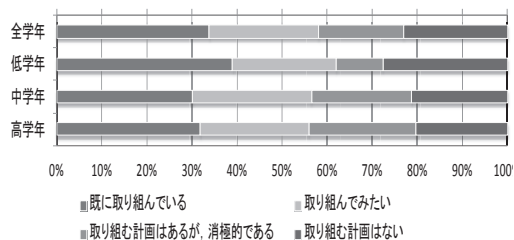


図3 道徳の授業の中でのキャリア教育の実践状況

道徳の授業におけるキャリア教育の取組としては、「勤労」に関する内容が多く、道徳的価値に即して取り組みやすいという記述が見られた。その際、具体的には、「心のノート」を活用して、自分が思ったことをノートに書いて、友達が書いた考えとも比べて、自分のノートに付け足す活動を取り入れていたり、学んだことを日常生活で考えさせる工夫を行ったりすることで、日常生活での勤労意識や役割意識を育もうとしていることが記述されていた。

また、低学年において積極的に取り組まれている理由としては、このことに加えて、平成二十年改訂の学習指導要領において、低学年に「4 - (2) 働くことよさを感じて、みんなのために働く」という内容が新たに加えられたことも関係していると推察される。

また、自由記述から、キャリア教育に資する能力よりも勤労や職業に関する内容項目の学習に強く関心があり、キャリア教育と道徳の授業を、別のものとして考えている教員もいることがわかった。

しかし、キャリア教育で育てたい能力としては、「1 - ①自他の理解能力」や「1 - ②コミュニケーション能力」等の他者との関係性に関する能力も含まれている。それゆえに、思いやりを中心として他者の視点に立って考える内容項目を学ぶこともキャリア教育において育てることが期待されている能力の育成に資するものと

考えられよう。

その意味からも、道徳の授業の中でのキャリア教育の取組としては、必ずしも、勤労という内容項目に限定する必要はなく、もう少し、幅広い視点から道徳の授業におけるキャリア教育の取組を考える必要があると考える。

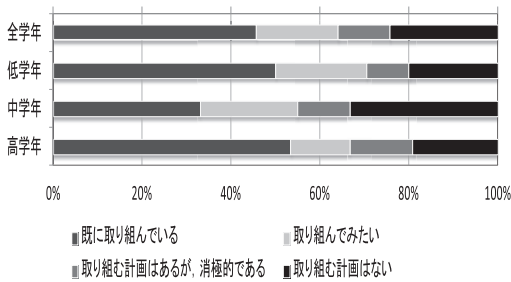


図4 生活科・総合的な学習の時間の中でのキャリア教育の実践状況

生活科・総合的な学習の時間でのキャリア教育について、中学年では、他の学年と比べ、あまり積極的に取り組まれていない。一方、低・高学年は中学年に比べて、積極的に取り組まれており、特に高学年では、他の学年に比べて、積極的に取り組まれていることがわかった。

具体的には、低学年の生活科において、町探検や地域の人とのかかわりをもつ体験を行っている。さらに、働く人へのインタビューを行うことで、働く喜びや願いを知る等、その仕事についての理解を通して、キャリア教育を行っていることが取組事例として挙げられていた。このように、身近で働く人々に対して興味や関心を持たせることは重要であり、身近で働く人々を直接見学するといった体験活動を通して、職業観の育成の基礎を育むことができる（文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導研究センター（2011））。

生活科・総合的な学習の時間では、他教科の学習と比べて、地域の方との交流活動や調べ学習といったフィールドワークが多く、児童自らが主体的に交流の計画、実施、振り返りを行ったり、調べたり、考えたりすることを通して、様々な人々と共に生きる態度を身につけることが可能である。

したがって、4領域8能力における「1-①自他の理解能力」や「1-②コミュニケーション能力」、「2-①情報収集・探索能力」、「2-②職業理解能力」といった能力が、生活科・総合的な学習の時間においては、育成される可能性が高いことが推察される。つまり、生活科・総合的な学習の時間の中では、キャリア教育において育てたい能力が直接的に育てられる学習機会が多いことが推察され、キャリア教育と密接に関連していることがわかる。

一方で、キャリア教育として十分取り組めていない理由として、全学年共通して、「時間の確保が難しい」「年間計画に入っていない」といった学校での実態と、「どのように取り組んでいいのかわからない」といったキャリア教育の内容や指導方法に対する理解が十分ではないことが挙げられていた。

つまり、他の取組と同様に、キャリア教育の内容と、生活科・総合的な学習の時間で学ぶ内容とが、十分つなげてとらえられていないことが推察される。

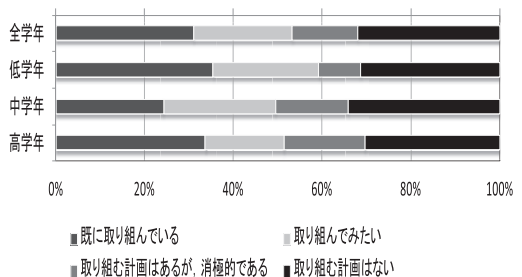


図5 学級活動の時間の中でのキャリア教育の実践状況

学級活動の中におけるキャリア教育の取組について、中学年では、他の学年と比べて、あまり取り組まれていないということがわかった。また、低学年では、消極的であることが他の学年より有意に少ないことから、学級活動の中におけるキャリア教育について、少なくとも消極的ではないということがわかる。

学級活動の中における取組事例としては、全学年共通して「係活動・当番活動」が挙げられている。具体的には、低学年では、「係活動・

当番活動」を通して、「役割把握、および責任を果たすことの大切さを理解・実践させる」「みんなのために役立っているという気持ちを育てる」「責任感や、人の役に立つ喜びを感じさせたりする基盤をきちんと育成する」という事例が挙げられている。また、キャリア発達課題の観点からも、係活動や当番活動に取り組ませることによって、自分に割り当てられた仕事や役割の重要性を理解させ、それと同時に、作業や準備や後片付けをしっかりとる事の大切さを学ばせることが大切である（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2011）。中学年では、「係活動に対して、反省会や発表会を行うことや、清掃の仕方について話し合い、責任をもってできるように意欲づける」という事例が挙げられている。また、キャリア発達課題の観点からも、係活動や当番活動に、積極的に関わらせ、働くことの楽しさを実感させることも重要である。高学年では、「係の仕事の意味、なぜ行うのかについて話し合い役割認識を高めながら、与えられている仕事を行い、系統的に取り組み、自分の役割という視点から、学級全体での役割という広い視野で考えることができるようになる」という事例が挙げられている。

このように、係活動・当番活動を通して、4領域8能力における「3-①役割把握・認識能力」を育てる取組が行われている。

また、仕事に直結することだけではなく、学級活動という特性から、「話し合い活動」についての記述も多く見受けられた。具体的には、「グループエンカウンターやSSTでコミュニケーション能力を高めたり、人間関係形成能力を高めたりするようにしている」ということや、「相手のことを認める『ほめほめタイム』を設けて、他者の良いところ探しを行う」ということ等、他者を認めたり、自分の気持ちを伝えたりすることを通して、「1-①自他の理解能力」や「1-②コミュニケーション能力」といった能力を育てる取組が行われていた。

さらに、中学年以降では、「将来の夢を話し合う」といった具体例も挙げられていた。特に、高学年では、卒業文集作成を通して、自分の将

来と向き合う機会があったり、考えたりする機会がある。この機会を通して、自分の将来と向き合い、何をしていくべきなのか考えることにつながる等、「3-②計画実行能力」を育てる取組が行われていた。

しかし、十分取り組まれていない理由として、全学年共通して、時間の確保の問題や、「生活科・総合的な学習の時間での取組」と同様、キャリア教育の内容や指導方法に対する理解が十分ではないことが推察される。

特に、中学年では低・高学年に比べて「既に取り組んでいる」が有意に少ない。このことは、学年段階における取り扱う活動内容の明確さの差ではないかということが自由記述から推察される。例えば、低学年では、係活動・当番活動が他の学年以上に数多く具体事例として取り上げられ、その内容として、しっかりと時間をかけて教えることの必要性が挙げられている。また、高学年では、中学校への進学や将来への夢、目標を考えさせること等、移行段階や将来の事がある程度イメージを持ちながら考えることができるため、「3-②計画実行能力」を意識的に育てる取組が可能である。

しかし、中学年ではこのような取り扱う活動内容の明確さがやや弱いことから、「既に取り組んでいる」という回答が他学年に比べて有意に低いという結果になったのではないかと考えられる。

キャリア教育で育てたい能力としては、将来のことを考えるだけでなく、日頃の活動から責任感を育ませたり、コミュニケーション能力を高めたりすることも含まれている。

特に中学年の段階は、中学年のキャリア発達課題として「①友達と協力して活動する中でかかわりを深める。②自分の持ち味を発揮し、役割を自覚する。」が挙げられているように、友達との関係性を豊かに育てていく段階でもあるので、係活動や当番活動を責任を持って果たすことや、人の役に立つという勤労に直結するねらいだけでなく、学級活動を通して、友達と協力して、多様な集団・組織の中でコミュニケーションや豊かな人間関係を築く能力を育

むこともねらいとして取り扱うことが考えられる。

このように、キャリア教育で育みたい能力についても、キャリア教育における学習内容として位置づけを行い、捉え直すことで、中学年における学級活動の中での取組の可能性を広げることができるものと考えられる。

職業・勤労に直結しづらい時間（各教科、学校行事、委員会活動）に関しては、学年による違いは見られるものの全体として、「既に取り組んでいる」、「取り組んでみたい」と考えている教員は半数を下回った。（図6、7、8参照）

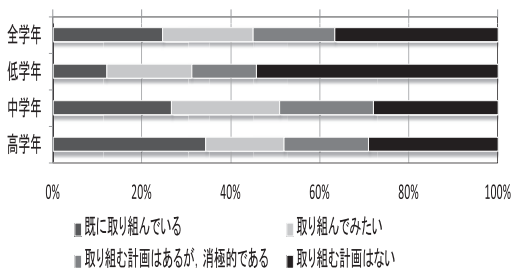


図6 各教科（生活科を除く）の中でのキャリア教育の実践状況

各教科におけるキャリア教育の取組について、既に取り組んでいるとする者が、低学年、中学年に比べて、高学年が有意に多いことがわかった。さらに、低学年では「取り組む計画はない」が有意に多いことから、中学年・高学年に比べて取り組む計画が少ないことがわかった。

各教科におけるキャリア教育の取組としては、低学年は、中・高学年に比べて、その取組が有意に消極的である。この理由としては、低学年では、社会科がないこと、そして、社会科にかわる教科の生活科が除かれていることで、キャリア教育に資する内容が中・高学年に比べて少ないのではないかと考えられる。

また、自由記述から、中・高学年では、主に社会科を中心にして取り組まれている記述が多かったことから、各教科における取組としては、特に社会科・家庭科を中心に、4領域8能力における「2-②職業理解能力」や「3-①役割把握・認識能力」を高めることが期待でき

る。

しかし、その一方で、各教科において取り組めていない理由としては、「時間の不足の問題」が多く挙げられており、他には、キャリア教育の内容や指導方法に対する問題が挙げられていた。

また、低学年を含め、各教科における学習で、「伝える活動を通してコミュニケーション能力を高める」ことや「聞く習慣を身につけさせ、他者を理解するように努める」ことを取組として行っている者もあり、「1-①自他の理解能力」や、「1-②コミュニケーション能力」といった能力を育てる学び方に関しては、社会科や家庭科だけでなく、他の教科においても推進されていると考えられる。

つまり、各教科における取組としては、職業・勤労に直接関係する学習内容以外に、コミュニケーションを活用した学び合い等、キャリア教育で育てたい資質・能力に資する学習は社会科や家庭科以外においても十分展開することが可能であると考えられる。

学校行事については「取り組む計画はない」「取り組む計画はあるが、消極的である」の回答が半数を占めており、他の活動と比べても全体として消極的であった。

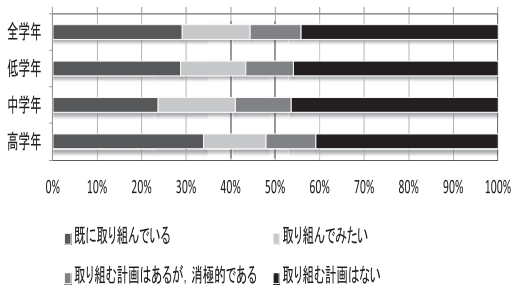


図7 学校行事の時間の中でのキャリア教育の実践状況

このように、十分取り組めていない理由としては、全学年共通して、時間の確保の問題や、「重点を置いていない」「題材にキャリア教育につながる題材がない」「キャリア教育について勉強不足・必要性を感じていない」「取り組み方がわからない」「他の内容を優先してしまう」

といったことが挙げられていた。

さらに、学校行事という特性から、「学校全体での共通理解が難しい」「1年から6年まで幅広い年齢層で難しいのではないか」という記述も多く見られた。

その中で、学校行事の中でも「クリーン作戦」等の「勤労生産・奉仕的行事」として、職業観・勤労観を育むための領域・能力の「2-②職業理解能力」に直接関わるものがみられた。しかし、これらの取組は現在、総合的な学習の時間において行われることも多くなっており、学校行事の中での取組として少なくなっている。

ところで、学校行事は、運動会や、縦割り活動等での異学年交流を行うことができるという利点も持っている。異学年交流を通して、低学年では、「仲良しペアを作る」といった簡単な取組から始めさせることで、活動をする楽しさを体感させ、仲良く助け合おうとする態度の基礎を培う。中学年、高学年になるにつれて、低学年にとってよりよい活動になるための工夫を考えさせることで、他者を理解するためにはどのようにすればよいかを学ぶこともでき、「1-①自他の理解能力」や「1-②コミュニケーション能力」を高めることを通して、人間関係を豊かにすることが期待できる。

また、中学年・高学年では、運動会や縦割り活動に対して、目標を持って取り組むことや、振り返りを行うことで、「3-②計画実行能力」を高めることも期待できる。

さらに、高学年の場合には、いくつかの学校行事について、委員会活動と関連付けて行うこともあり、特に「3-①役割把握・認識能力」や「3-②計画実行能力」の能力を高めることや、異年齢集団の活動に進んで参加し、高学年としての役割と責任を果たそうとする態度を育むことも期待できる。このように、学校行事においては、直接、勤労や職業に関して、学ぶものは少ないが、人間関係を豊かにする内容や目標をもって計画的に取り組む、自分の役割を責任をもって遂行するという点において、十分、キャリア教育を通して育てたい力を育むことが可能であると考えられる。

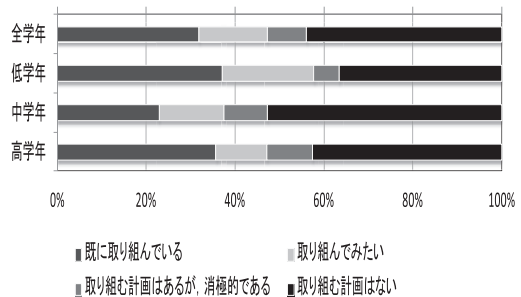


図8 委員会活動の時間の中でのキャリア教育の実践状況

委員会活動における取組としては、自由記述において、学校全体としての取組のものと学年における取組のものが挙げられていた。しかし、その取組事例からは、低学年の段階であるにも関わらず、全校での取組を丁寧に記述されているものも多く、低・中・高での学年差の違いとして明確に見ることが難しく、取り上げられている取組事例を低・中・高と分けて扱うことができなかった。その中で、いずれの学年においても、取組事例として、「ボランティア」「学校、全校のお世話をしている」ということが挙げられていた。

委員会活動の特性から、学年差は見られなかったが、取組事例からも、4領域8能力における「3-①役割把握・認識能力」、「3-②計画実行能力」や、全校のことや、1,2年生のことを考えて仕事を遂行したり、うまく活動できるように話し合ったりすることで、「1-①自他の理解能力」、「1-②コミュニケーション能力」といった能力を委員会活動を通して育成することの可能性が推察される。

しかし、先の取組事例の内容の示され方からも、中学年が「既に取り組んでいる」を回答したのが有意に少なく、「取り組む計画はない」を回答したのが有意に多かった理由に関しては、今回の調査からだけでは、十分な理由を見出すことはできなかった。

キャリア教育実施上の課題とキャリア教育についての思いについては、多くの教員が、キャリア教育の意義や必要性については、認識しているものの、時間の確保が最も大きな課題とし

て挙げられていた。また、その内容や、具体化のための方法など、キャリア教育を推進するための専門的な知識を充足することが必要であると考えており、そのためにも、教員研修の充実を図ることが大きな課題として挙げられていた。(図9, 10参照)

- 1 時間の確保 2 指導担当教員の確保 3 予算の確保
- 4 職場体験等受け入れ先の確保 5 プログラムの確保
- 6 キャリア教育に関する専門的な知識の充足 7 教員間の共通理解
- 8 小・中・高での体験学習内容の重なるの解消 9 その他

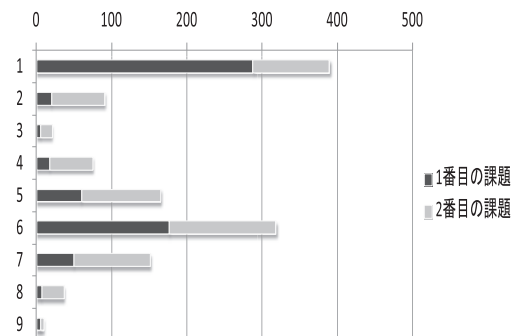


図9 キャリア教育を実施する上での課題

- 1 児童生徒にとって有意義である 2 望ましい進路指導が実現できそうな期待感がある
- 3 提唱されている内容が分かりにくい 4 学校現場に浸透するかどうかわからない
- 5 教員が果たすべき役割が分からない 6 進路指導とキャリア教育の違いが分かりにくい
- 7 一時的な流行で、いずれ忘れ去られる 8 その他

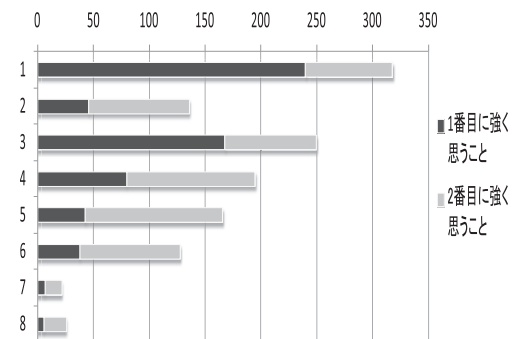


図10 キャリア教育についての思い

キャリア教育において育てたいとする能力の必要性については、4領域8能力について、低学年・中学年・高学年による有意差はなく、全ての能力において、「必要である」「どちらかといえば必要である」の両者を合わせると9割程度となった。そして、職業・勤労に直結するような能力のみを必要と感じているわけではなく、むしろ、「自他の理解能力」(図11)や「コミュニケーション能力」(図12)といった能力について、その必要性を強く感じているということがわかった。(図11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18参照)

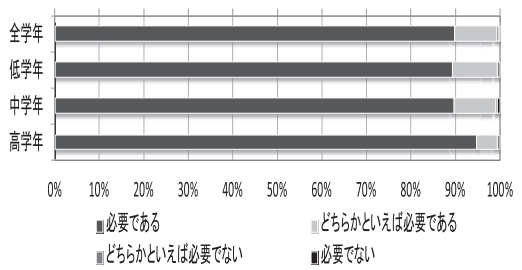


図11 自他の理解能力

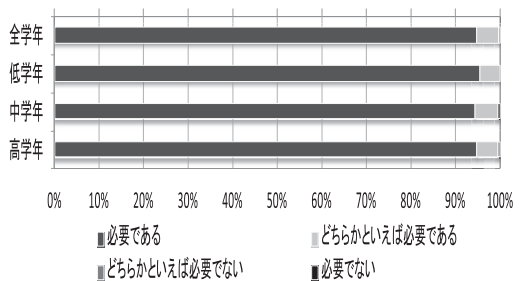


図12 コミュニケーション能力

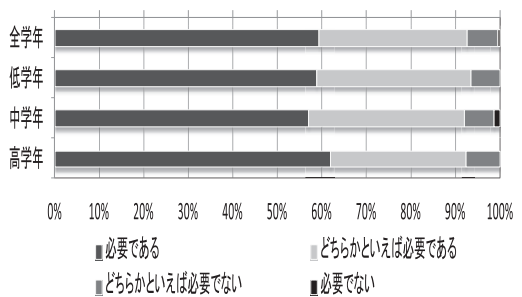


図13 情報収集・探索能力

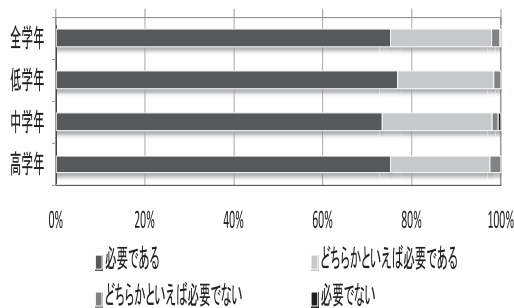


図14 職業理解能力

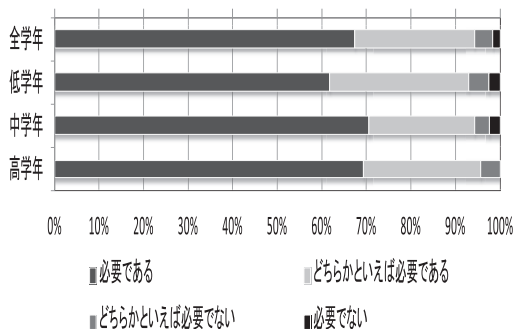


図18 課題解決能力

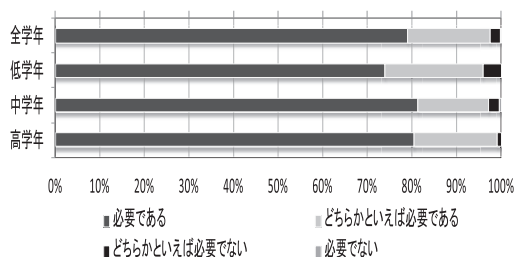


図15 役割認識・把握能力

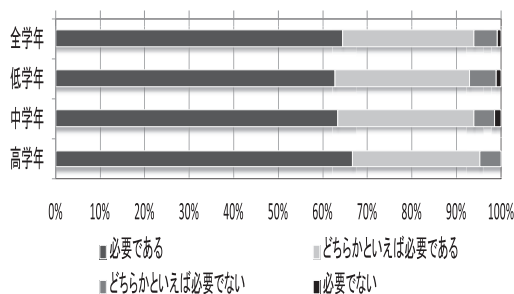


図16 計画実行能力

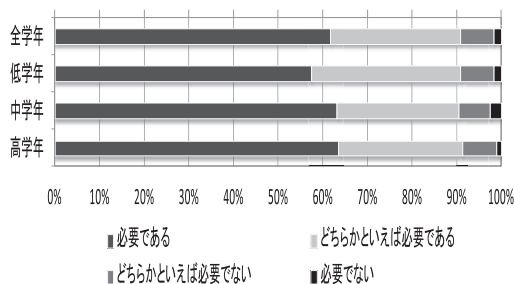


図17 選択能力

つまり、キャリア教育の取組の現状については、一般的に、勤労や職業に直結するものを行うことと考えられがちであり、「自他の理解能力」や「コミュニケーション能力」を育む教育は、あまり行われていないという実態があるが、キャリア教育において育てたいとする能力の、教員の認識としては、勤労や職業に直結する能力よりも、むしろ、その基盤となる能力が必要であると考える者が多く、矛盾した結果がうかがえた。確かに、キャリア教育の実施状況からは、勤労や職業に直結するものが多く見られたものの、生活科や総合的な学習の時間、学級経営の中では、「自他の理解能力」や「コミュニケーション能力」を育むことにつながる実践も多く示されており、キャリア教育を通して育みたい能力についての取組は、勤労や職業に直結するもの以外にも幅広く行われていることがわかった。

キャリア教育の可能性と今後については、キャリア教育が直接的に、勤労観や職業観を育てるだけでなく、主体的に学ぶ意欲の向上につながるという者が多いことがわかった。(図19)

また、小学校段階におけるキャリア教育の必要性についても、多くの者がその必要性を感じていることがわかった。(図20)

さらに、図9、10より、キャリア教育に関して、児童生徒にとって有意義であると回答している者が多い反面、その提唱されている内容が分かりにくいという回答が続いていることから、今後は、その具体化をどう図るかということについて考えていく事が必要となってくるこ

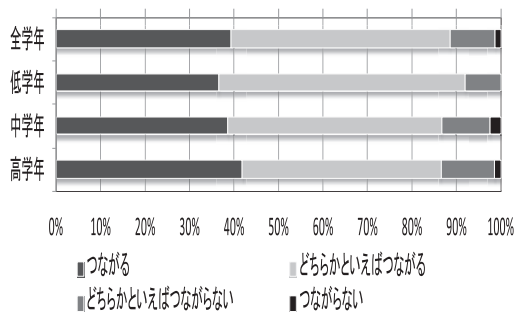


図19 小学校段階におけるキャリア教育は教科の学習や主体的に学ぼうとする意欲の向上につながると思いますか。

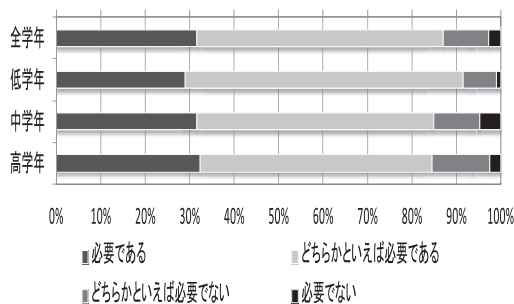


図20 小学校段階において、キャリア教育を今後一層進めていくことは必要だと思いますか。

とがわかった。

また、キャリア教育が児童にとって必要だと考えているが、その内容を具体的に実施するに際して、内容がわかりにくいことや、現場で具体化がうまく図られていないということが課題として挙げられており、具体的に実施できるようになるためには、時間の確保やキャリア教育の内容についての専門的な知識の充足が挙げられ、更なる教員研修の必要性が改めて求められていることがわかった。

このような、意識の実態から、キャリア教育の意義は、勤労や職業に直結するものだけでなく、幅広い視点から捉えることができる可能性が示唆された。

4 総合考察

本調査では、これまで活用されてきた「4領

域8能力」の必要性について、どの能力に関しても、その必要性は高く感じているという結果となった。しかし、その一方で、キャリア教育に対する取組は未だ十分には推進されていないという結果が見えた。その理由としては、キャリア教育を職業・勤労に直結した教育内容と限定的に捉える意識が先行しているのではないかと考えられた。また、キャリア教育で求められる能力を育むための内容について、実際には、幅広く行われているが、キャリア教育の内容に関してわかりづらいことや、理解が十分進んでいないといったことが本調査によって明らかになり、既に取り組んでいる教育内容との結び付きが意識づけられていないことがわかった。

これらのことから、キャリア教育で育みたい能力は単に、職業・勤労に直結した内容だけでなく、その基盤となるコミュニケーション能力や、自他の理解能力といった様々な能力から成り立っていることを理解することによって、小学校におけるキャリア教育の充実及び推進の可能性が高まることと、そのための教員に対するキャリア教育の研修の一層の必要性が示唆された。

今後は、教員研修を通して、キャリア教育に関する正しい理解を深めるとともに、各学校において、新たな教育活動を行おうとするよりも、キャリア教育の視点からこれまでの教育課程を見直し、意図的・計画的に、より充実したキャリア教育を推進することが望まれる。

5 今後の課題

本研究における調査は、高松市という地域に限定したものであった。したがって、他の地域でも、同様のことが言えるのか、調査の範囲を広げていくことや、これまで行われていたことを、キャリア教育の視点から捉え直して、再構成した教育課程をもとに、実践することによって、キャリア教育で育てたい能力が十分育つかどうかを具体的に検証することが今後の課題として挙げられる。

[引用・参考文献]

- 愛知県教育センター (2006). キャリア教育推進に關する調査研究. 愛知県総合教育センター研究紀要, 97.
- 新井立夫 (2011). 高校での実践から小学校のキャリア教育に望むもの. 児童心理, 62 (3), 157-163.
- 浅野信彦・伊藤友美 (2009). 小学校におけるキャリア教育の現状と課題—実践からの示唆—. 文教大学教育学部紀要, 43, 13-23.
- 井戸和男 (2009). 若者のキャリア教育の課題と対策についての一考察. 聖泉論叢, 17, 1-20.
- 石田美清・古賀一博・三村隆男・藤田武志 (2005). 教職課程における「教科以外の活動の指導」に必要な資質能力に関する調査.
- 石崎一記 (1995). 自己決定力はこうして育つ. 児童心理, 49 (17), 1829-1836.
- 河崎智恵 (2005). キャリア教育実践に貢献できる教師教育の課題. 教育実践総合センター総合紀要, 14, 75-81.
- 菊池武剋 (2011). 日本におけるキャリア教育の現状と課題. 児童心理, 62 (3), 47-56.
- 国立教育政策研究所生徒指導センター (2002). 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について. 文部科学省.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2009). 自分に気付き, 未来を築くキャリア教育—小学校におけるキャリア教育推進のために—. 文部科学省.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2011). キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書. 文部科学省.
- 三村隆男 (2011). 小学校のキャリア教育をどう考えるか—教育活動を見直す視点. 児童心理, 62 (3), 2-11.
- 文部科学省 (2003). キャリア教育の推進に関する総合的調査協力者会議—中間まとめ.
- 文部科学省 (2004). キャリア教育の推進に関する総合調査研究者会議最終報告書.
- 文部科学省 (2006). 小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き—児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために—.
- 文部科学省 (2008). 教育振興基本計画.
- 清水和秋・花井洋子 (2007). キャリア意思決定尺度の開発—その1: 大学生を対象とした探索的因子分析からの尺度構成—. 関西大学『社会学部紀要』, 38, 97-118.
- 白木みどり (2009). キャリア教育にかかわる価値観形成についての一考察. 上越教育大学研究紀要, 29, 75-86.
- 滝充 (1995). 自己決定力を育む学校教育. 児童心理, 49 (17), 1800-1806.
- 土田雄一 (2011). 小学生のころに育てたいこと. 児童心理, 62 (3), 22-29.
- 浦上昌則 (1993). 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連. 教育心理学研究, 41, 358-364.
- 渡辺三枝子 (2011). イギリスのキャリア教育の取り組みから学ぶ. 児童心理, 62 (3), 57-64.